

教室内飼育が子どもに与える教育的効果についての調査結果（中間発表）

阿部 温 （社）群馬県獣医師会 学校愛護指導委員会委員

目的

群馬県内の小学校での動物飼育体験が子どもの発達に及ぼす影響を分析検討し、今後の小学校における動物飼育や動物愛護指導等への参考とすることを目的に、教室内で動物飼育を実施している小学校を対象とし、動物飼育開始前と半年後に質問紙による調査を行い、子どもの発達の側面として向社会的行動及び共感性の発達への影響を検討した。

方法

- ・対象児：A 小学校の1年生及び5年生。対象児数は、小学校1年生22名（男児：17名、女児：5名）、5年生26名（男児：17名、女児：9名）である。
 - ・動物飼育方法：1クラスに1羽のホーランドロップ種のウサギを教室内もしくは教室に面した廊下で、飼育ゲージ内で飼育。ウサギの世話の主体は児童とする。
 - ・飼育指導：群馬県獣医師会の担当獣医師が飼育指導、備品の供給、病気やケガの治療を行う。
 - ・手続き：動物飼育開始前と半年後に、記名式による質問紙法にて、学級担任により、クラス単位で実施する。なお、1年生については、一問ずつ丁寧に説明を加えながら実施した。
 - ・尺度
 - 向社会的行動尺度
中川らの研究（2002）で使用された尺度、および菊池（1988）の向社会的行動尺度を修正して使用する。
 - 共感性尺度
桜井（1986）の児童用共感生尺度を基に、修正して使用する。
- なお、両尺度とも、5段階評定で回答を求めた。
- ・分析：群馬大学教育学部松永あけみ教授に尺度の作成および分析を依頼した。

結果

1. 5年生の結果

1.1 尺度の信頼性

5年生390名による予備調査の結果を基に、尺度ごとに因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。

・ 向社会的行動

最終的に7項目からなる1因子の尺度構成となった。信頼性係数は $= .71$ である。

具体的な質問項目を表1に示す。

表1 向社会的行動尺度の質問項目

あまりなかがよくない友だちにも忘れ物をかしてあげる。 電車などでおとしよりの話しあいてになってあげる。 気持ちの落ちこんだ友だちに話しかけたり、電話したり、手紙を出したりする。 バスや電車で、おとしよりやけがをした人に席をゆずる。

雨ふりのとき、あまりなかがよくない友だちでもカサに入れてあげる。
 あまりなかがよくない友だちでも、なくしものしたら、一緒にさがしてあげる。
 知らない人がハンカチなどをおとしたとき、教えてあげる。

・ 共感性尺度

最終的に2因子（直接的共感と間接的共感と名付けた）が見いだされた。
 直接的共感は8項目からなり、人や動物への共感である。信頼性係数は $= .82$ である。
 間接的共感は3項目からなり、歌や本などを通しての共感である。信頼性係数は $= .77$ である。
 なお、両因子の合計を「共感性」得点とする。
 具体的な質問項目を表2に示す。

表2 共感性尺度の質問項目

<p><直接的共感></p> <p>だれとも遊べないで、ひとりぼっちでいる子を見ると、かわいそうになる。 たとえ自分はプレゼントをもらわなくても、他の人がもらったプレゼントをひらくのを見ると、楽しくなる。 泣いている子を見ると、自分までなんだか悲しい気持ちになる。 けがをして苦しんでいる子を見ると、とてもかわいそうになる。 友だちがニコニコ笑っていると、自分までなんとなく楽しくなる。 元気のない子を見ると、心配になる。 動物がきずついて苦しそうにしているのを見ると、かわいそうになる（動物） 犬や猫を人間と同じようにかわいがる人の気持ちが、わからない（動物）</p> <p><間接的共感></p> <p>悲しいドラマ（げき）を見ていて、つい泣いてしまうことがある。 聞くととても悲しい気持ちになる歌がある。 悲しい物語や映画を見ていて、泣くようなことはない。</p>	
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

1・2 向社会的行動および共感性の平均得点の変化

平均得点の結果は、表3、図1の通りである。

表3 5年生の向社会的行動および

	共感性の平均得点	
	飼育前	飼育半年後
向社会的行動	3.44 (0.92)	3.49 (0.75)
共感性	3.44 (0.96)	3.66 (0.74)
直接的共感	3.84 (0.83)	3.99 (0.68)
間接的共感	3.00 (1.32)	3.28 (1.10)
動物への共感	3.96 (1.08)	4.06 (0.96)

* ()内は、SD

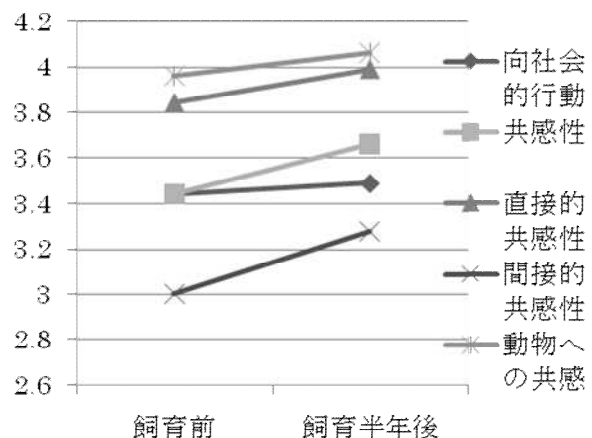


図1

飼育前と飼育半年後の平均得点の変化を見るために、尺度ごとに、対応のある t 検定を行った。その結果、共感性得点においてのみ 5 % 水準で有意であった ($t = 2.03$)。共感性得点は、飼育前よりも、飼育半年後の方が高くなっている。

2. 1 年生の結果

2.1 尺度

5 年生の分析で用いた尺度と同一の質問項目で、かつ、尺度の信頼性が一定レベル以上になったものを用いて分析を行った。

具体的には、向社会的行動尺度 ($\alpha = .78$) と共感性尺度 (表 2 の直接的共感項目 $\alpha = .69$) について分析した。

2.2 向社会的行動および共感性の平均得点の変化

平均得点の結果は、表 4、図 2 の通りである。

表 4 1 年生の向社会的行動および

	共感性の平均得点	
	飼育前	飼育半年後
向社会的行動	3.63 (1.11)	4.23 (0.72)
共感性	4.21 (0.94)	4.38 (0.89)

* () 内は、S D

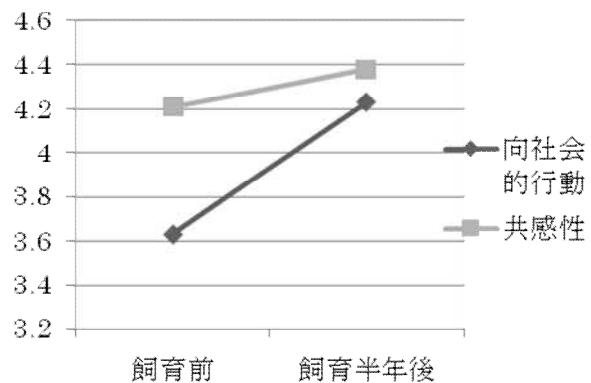


図 2

飼育前と飼育半年後の平均得点の変化を見るために、尺度ごとに、対応のある t 検定を行った。その結果、向社会的行動において 5 % 水準で有意であった ($t = 2.51$)。向社会的行動得点は、飼育前よりも、飼育半年後の方が高くなっている。

考察

5 年生においては共感性において、飼育半年後に有意な得点の上昇が見られ、室内での動物飼育体験による効果が推察される。1 年生においては向社会的行動において、飼育半年後に有意な得点の上昇が見られ、室内での動物飼育体験による効果が推察される。しかし、今回の調査は、室内での動物飼育を行っている 1 校のみの結果であり、今後は、調査対象校を増やすとともに、動物飼育をしていない学校や室外で動物飼育をしている学校との比較や、学校の立地環境の違いによる調査が必要である。